誹諧埋木

完

誹諧埋木目錄

季吟撰

誹諧之事

六義

発句之切字

本平之発句

根本三付而句名弱之事

於云爰也之奇之んは

手尓於葉

本草奇方ニ云ル 跳諧
皮肉骨ニ云ル 跳諧
主草行乃ヘ以ノ
有文乃作文乃作
二五三四文二四三
親乃疎乃
篇序記出流
乃躰

慶長文庫

跳諧ト云フモ與義相ニ通書ニ跳諧者
滑稽也滑ハ姓氏也稽詞不留也史記滑
稽傳考索云滑稽旺寓也言出言成章詞
不窮竭若滑稽旺頂也
傳云
大史公曰天道恢恢豈不大哉談言微中亦
可以解紛 優孟多辯常以諫喉諷諫優
論若由喉出統合於大道隆于髡滑稽多
辯郭舍人發言陳辭雖不合大道於合人
主和悅 毛詩傳云滑稽也

桃猪乃字いまざしまむかへ　まて居へ。
偏は戯れとなつわ部あるもあらざるう。
七業は滑稽乃ことを的ついたらまあいけく。
たうも成道着也。又桃猪い桃を通してたうと
此義を逆しうるう。故はまを以推滑稽を
乃字ひとを毋流刑にあるもけ言猪史とを水
よいひ子すも。或い相云みて此義とあるたる。
仏宇又んのことあ頃はあるくれうへし
又云桃い者桃也毋桃者可用俳字ようミ　鎮狂
古今指南ふい用桃字むふ寓也

愚案ハよ。あて仁指南ことあるの後指きこと如し
八重云市抄云或流曰。桃猪有相ク一俳猪。二桃猪
三俳猪四滑稽。五猪猪イニ誹ー。六謎字也空戯
八鄙読。九狂言イニ杜云
愚案ハよ。或義桃猪い狂をんもとをに狂云也
桃猪い狂相云ーてんもうる也。桃猪の行
字かうこはのうる也。桃猪いんあるのふきと
毋ハ所相ーとりて狂うる也滑稽い由りあ
かうこよめりを。をんの奥義相謎字いる
をくるもうこいるる也空戯いひとをうた

きれて実をくなし紙鄙談いやしけれとも
きてこそ云てうるやうなれ偏まれりきやう
よりつるやうなれとも流よりしく史とも水
こまけていひなせるやうとそ
能為卿歌合古今集の説よりは説とこそ世間に
いわまてうやうなる詞なるとこそいつてあり古集のこんい
更よりうすくそこひうるの風情とよめるとそい
うこそやとやはまてうされと寄のあらさるをも
こまし侍るへしとのこと
家紙云紙に南尾切説胡粉切和也合也

はしきいかの事紙流の紙に物とかるをくし
人のわらはまとのはうとくいひなせるう
とそ南流より不用なく南流のこんい紙道に紙道
紙道紙流とこそ云まとよりかるつわ史記より滑稽
傳とこそれは紙うり
思業より紙流のこんいとそ云なせる奥に物
とひとしきやうなる八雲御新能為卿歌
流のこんいとくいさうなるひめあるとそ
いまを抜まとこそ流るれとこそよなら
なくこんの人

又書頭丸の説作り合云内

よみるにたへぬものん

六義のまず先風雅のことのはよい古今
集のそれなどと宗旨英門の説よりは六義を
根ないも詩ものとゆとまりのうくもと被
見してぞきこゆるひとんとやのひかり
連哥よいん歌俳諧のことのいかに
もろつをもるときてあるべき宗旨をとる
しるべきよ俳諧の句ことのあるべなる。
今は説よりさらひく先師のあり給る句
ともをひく称決よるるとくわしよそれ

一風　八雲御抄よ風をいうへうもの物
とはよそへよめるやまとをいくそのん
をさしもとしわとこ　宗旨英門の
説よ風とのいふこのもとをとしど物よ
よせわとせくぞ風のあるるあめなり
風の哥をのくわるるみやいるのまして
をあれもの事のよりとをいるむしてあるの物を
ひきよせくるよむと風のあるもの。板説抄
の説よいるる毛詩ことと風化下の風刺と

但云風化風刺皆謂譬喻不行之也上業は
用意云風い風也そふくるむせそふくるい色と
あらはるいはしらびて義とさとるもせ故は
風とそ人うこと云。家紙古今乃物云毛伯
乃六義はいかく義ありて或經緯といひ
或い糾用とかけるもせわ風ありて奥と
奥をうきあるもを根をもつ年期は異也
又義通をる説しありといつまを頼いん敬
傍部をいへ哥ありて　名いをく新いう色
部部をうきを白をりて二象を同板と附白

天線揚しをまりぬへし掛のそへて白乃ん
とおるうすと風乃白なるへしとしるるあり
宗松東家邦をんはひ同はんそへいふ
義也ぞうをあるうを法うをなそへ伯
ら法。能諸乃白もなあるとはん
よめかをうをはんをうをせをも柳髪長九
是白乃中にていふ白家程の四孫をん伯附
ををのをのいをとあやられ梅乃花
ゆゆ伯わりをやるひ伯るへ

二賊　八雲のうしぬすびと賊いかそへ奇也　京極
黄門記より賊い寄人乃かたらひ也　義人
乃大事也　心を一遍よとめられて偏執の
こと紙数人とゝへ　清浦云　公義云賊こく
言葉也　盗捕陳　今こく改盗賊　若盗人今賊
捕也　ちくこと　紙ひくこと　乃ち紙
ひくこと　ちよいこと　人をのとかそへ
ちよいこと　数より賊とかそへこと　なり
家紙ひくこと　ちよかそへ　たとふ
ぬすびと賊い寄也　捕へ盗人捕へ盗人へ

ちよいこと　畳いかそへ　ちよ同こと　捕こと盗
乃ちと同　ひやなこと　ひり心数　偽賊乃ま奇
れ白ひよい　地こと　にんとくこと　ものかよりこと
白ひ乃人　しとうや　乃ものひぬ　家賊　まこと
一寄人　よかこと　めさこと　義こと　とこと　い彼黄門乃
此賊よ　かこと　ひ物こと　や公家賊乃ひ白　ま
ま　ぬこと　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

菜て可萩すゝき菊さくや　長明九
山乃端や一四さくらゆかりとも　季吟

三比　八雲抄ハ云ハ物ハ云ハ寄也物ハ
ものゝ名ハ寄也ハ物ハ云ハ寄也
よしへ寄ハ物ハ也ハ清輔云　正義云
見合之失不敢仕言取詰類以言之　今案
詰ハ物ハ也ハ物ハ也ハ物ハ也ハ物ハ
ら人寄ハ云蓮ハ俗乃古今の字書ハ詰ハ
物ハ也ハ物ハ物ハ也ハ物ハ也ハ物ハ
物ハ也ハ物ハ也ハ物ハ也ハ物ハ也ハ

なとを書ハ物ハ人物乃ハ物ハ物ハ物ハ
ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ
物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ
て義乃字と麿ハ物ハ物ハ物ハ物ハ
ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ
も物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ
ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ
彼定家乃清輔ハ物ハ物ハ物ハ物ハ
ものと云義ハ物ハ物ハ物ハ物ハ
氷ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ物ハ

義俳諧とのくるひをなしんずへきよかいよひ
侍るなりや俳諧よハ
河政乃称ひくおりふつ志よく成　長好丸
らくひ古その和哥三神や月日星　季吟
八雲云典ハあまく人哥也六会古今よ

四　典

そへ哥よ同しやうるれと千すらしさ西さきへ
うりとらさり薗ん院殿乃宝玄ひしらう〜云
いそへ哥よちらしかりるも西とへがきへ云ハ
かくしたとへ云ハおくうるやなかハ津比云と
那辺さくとさ乃帝とそへ　とおろかくそう

上あしられさうくりて梅乃哥よりて下る
くへ云ハ息みとし述懐あとそ乃ませとひわ
ちりしてさし物よあらへてよめる之定家
流祝典よ二行あり發会典節典之發会典也
ふハ今乃よう息ハとよめる哥も也
自ら息ハよむとを何さるかうそうん乃
流乃ますとハよう何くにとも　又云節典を
よもとハ定時乃わ業よきこひて典あるを
とれりふくいひらうと節典ハしよ他し
周禮云　正義云見今之美嫌於媚諛

善古事ヲ以喩勧之　今案に興とは毛詩に
おこしとよめりおこしたとへといへれとも又
まなこしつる之数ゝに興とおこしへことをよ
字彙云興起也興乃字ハ同舁に從ふる也。
同ハあつまりて舁ハすゝみあくる也又云舁ハ
わかつに興ハあつまれる也木乃興とおもてに
とひ出て懐かる也やがて出へことをもとを
わかいふハたてることとりてのふ之を懐と拾
媚諛也云く人をおもひやる事ぬにいへるに
他をもとるなる也。漢乃毛傳ハ至れ興乃

毛ハ側声とよみたる也　宋儒ハ平声
として興を前後にはかふもしとする
おこるハわつよるの事る作し畢竟同
き也前後ハ作乃門句よハ又月ある
まね乃松風苔乃水ともいへるとれて毛くも
物よゆへ何ときるときもしいてえ
しる興乃句ある也そつ宋儒乃説ハ
志風ともいかよまるる柳水　風月乃ちの
柳や滝乃糸なともゆかりを引て物まれ
ことく興あることそともかえれて　桃

須磨にて

かりの緑は秋風ものこしけれ　長頭丸

やま下しそへてあるは乃内侍が　季吟

ちとせをむかえしみの葎

五

雅　八雲に云雅とてことに奇しと云り古し

もいにしへのいやしくしきを云や無心

云雅は心のあまさをすてしを云にあらず

まく一筋に雅しあそびをとひてすてたり

雅に二つあり一つには言雅二には意雅なり

言雅と云は只数にあらずしてそいよう

事を入れし也さて雅と云はんそふなる也

こころあまく何にまして事とせよ。

俗言を用ひ雅ことをしりそんと云

論る。言意とも云たわらやなきよのことは

ほそてかきにとゞめん此言はいかなく

わして何にすれて事ひとつ則えるま

やものやの如と俗ありのこんの事はとこうひ

それぞれ入んなる奇也清輔云毛詩

云言天下之事形四方之風謂之雅雅正

也政有小大故有小雅焉有大雅焉今案

雅いはのさまもさまざまにものとうかと
たゝへたるこゝろをぬき出て故に雅とてこゝろを云
宗祇云雅に雅より俗なれば俗雅を
略して雅とかきたるもの也雅に略とてこゝろを
わりなきふりの歌俗雅の詞なり多くは
雅の体よりうつりたるとこゝろをたちて
ものゝ句やごとくんとてこゝろを雅の
句やとの句をわかつ雅とてこゝろ
ふかくやさしきをもとすれば
雅の体とて

六頌

八雲云頌いとひ奇也是いせをかの
とて神よりうけたる也是ゆゑ云頌の神四よりの
くんあるや頌は人讃頌をもあ梨
いとひ奇とてやむくんあれば
毛詩云頌はもとゝ
ゆゑに讃頌の奇とゝやゝ何と神四よ
ゆくんあるゝ頌の奇とゝ人云ゆゑ故毛詩

序に云、吳藏法之部、實に成功の者、非
とのたまへり。もし六偉の中の頌の系の文なり
清潤云、心愛云、頌云、云、偈也、宮也、今之法華
改、愛云、今案、の頌い偈也、構撰之義也、後人い
かとなんや。数の頌といへることを云、宮紙を
頌い宮也、偈也。宮い主者の威徳を称ことわり
給て、かとなんや、偈いうこと、ひろめて
かとなんや、頌の詩い宗廟うして偈して神
まつりすや也、世をうめく神よりのうたを号
ばんやしこと、
心敬僧都の説て、花枝

みなもの玉のうてなとうたへり、
いとうるはしうかがやくとも、
序の中に、頌の句や、古との假名
とのたまへり。心の後に、あるべし人の書入る詞也
也、ゆゑ、ゆゑ、とかれて、後人とも、よんなもとて、
雖も、能者口傳あり。能間知とひきく
心、句、と、と、ある、ゆゑ、ゆゑ、とあるてあり
されば宮殿いとうんと神にあるべしとて。
神のりこすや代のゆゑ、とのたまへり。
とのたまへりこれ京極黄門の作れん宮紙

法師乃徒をもとめて叶はんとて洛陽
の宗匠の頌乃句のよきをひろひ
伝あまたはされとも梅のきくぶ長ぶ
真加あれ多者よりやめとあり生 季吟
長野九六義乃口伝よ云風の道とあらはす
ちくはとりてひらへよろきひらてをも
明いとのとりてそれなりわるしとをも
ろ也。真い拍とりてそれなりへく乃
ムをあらひらひも是風体真乃ひらきよ
ひくらいきれあるひもやゝ紙雅乃ん

つゝめい紙い拍紙ちをなるてあるつよいも
雅いすくしもあやいらしはるをもや。
頌いいもひてゝ称よりすも 宗祇法師云
六義乃中よ雅と執とるもあるいも
道とかとひらこしりも周詩思玄邪と用
ろんも。畢竟氏義と所ひとる蒙流乃ん。
宗邪云龍花蕊紫とんていいもいんを相紙
剣一。ち秋乃ひらよいも為沸と要乃理と
ろかしこ辛と称し。縁白とは。風紙法真
雅頌乃六義とをもして六道橋迴乃も

ひとはなをまつそら

題歌よみ侍ける 俊頼朝臣 牡丹 後拾遺

とゝへとも歳をふるれとをふるわさ
はなをしてのゝ人ゝ
はよまうせてこんはゝ
をあつめと是をまいいてゝ
なをしくふるへきとうめし

題 白乃切字

かゝる ちる花をおしゝゆくはしるる
うらをおもてにひるる身乃くま

もゝ 二条よさくひんさくの
かくよりはえ月乃
ゝわ 山乃いちこさくはよりわ
花桶と
ゝわ
む
ゝ
花
小西乃
和田寺
あ乃世ち

由己　天神そ梅乃雨しらる花色なし
何かあり頭陀ふくろ夜かへく
草蓆そむしりつけなかくまん
ろ　一霞よみてよる年かとりの邑
さそれ　施よさへ出され藤袋もひろし山
がしお　京の雑紀呂わしく吹花乃翁
ゟ　尋ねよる当ひとめ夕ろ春乃そゝろ
や　春うのと見かりよやかさわきも
あとまあやとふのうそのあさゝり
澂の外いみろんなき柳ゆかさくえん

松しる柳花本くいさくすか月
やい　きうしやくふ乃南山わくまん
くも乃暮かゝらし松ゆやい岩つゝし
ゑ　虫乃酒おはちくふえん乃咲くう
そ　いとゑくこいまふかとくよそ茶よみれ
雲んわの花ゝ花乃そ紅にえ
あり　蛇の紀を志ぬくし色柳八生ふ
いさ　くうとをいさ志くめひのつくし
いゑ　をくふさへおくゝいろふかくまん
宣　えうの宣小町ゆゑうやいせどり

花　まつ水は志をはこへかねは川も色
は　里をみてはこ人かりの世紫
実　の森折りてまけうちは我小扇さす
な　あは我とこうる花をうつしむ
く　千年をはへ七まつりまの数
誰　花さかりまれふくとへきよう月山
門　ととはひてよう河としの色の信
ぬ　をもや年乃おもひをよ猶ぬ小梅月
ち　さりまは思ひも恋よ花乃あめ
気字大概をわけ統りなる夜にそさうひの

何次定乃とはあくれ切字志らしく自
志りしかるし
下知
仮く折れ七年乃ひさとやへさう
くれて山おろそ千歳色乃錦に梅
花りこ都は春をはくれその花盛
ちりりはへこしいやく十二神
称我切りそかりかくるまちつし
やめ夕子ととをけなくまん
ちさらにもいかやこのまよませ解

里　よ　み　へ　う　け　や

せ

め

四十かさねのもんりうの世界乃さくら
ちるこそまひ十三種を云出 月
行あきくいつくしまのいちはやをいひそへてきれ
字は丸ひらがなのりうしまわり
ちるさいのうりうるてこなむ地紙
ひとはいつくしいはのあるうきの色
と四ツ乃切字
うくらさくえくはるとは花乃紙
玄蕃切八そやの引とまわり
うとは八花やはいくあるん

行とは白紙をひと世乃ひとはもりの紙
口伝ちり紙のんの乃うるわさて人乃うる
めいとくとはいくるゆくはれいかの紙
ふわりくさてはいりや。
大廻切 つ孫はなかきまや
ふまりやはくまりやいとふ花乃寿
ちりくはせるの花乃寿とまりりや。
三長切
者八々さ紙の本本解岩千花
三字切

くひてさへよ何のかのとあゝ　蕣の花

二字切

山さとやかけもと正月ことの書

三しのます

ゆしとをし　芥川　なとは現在のしし

おもくし　なかくし　おもし　ぬけし

なとは未来のしや　此二川のしは八

切字よ用るなり　おもし

ありしなとは過去のしにて切字よ成る

さるや　それよりても不の様々をもの白れ

現在のし。あれよろきも及ずして　此ひらいは未

来のしにて候る也

とりんぬ　ぬの　ぬのの事

これはふなりぬ　ありと見るまじく

これ定まりにしてたゝの有りとりんぬと云ん

ものとりんぬと云也　されはぬの字は切字

またひとき候し　ゆかしそうよ奴ぬをおもふし事也

ぬのぬと云は　おもくぬせぬなると云やうあれて

ふとえやうくへき不有とさておもくぬ此

よう。無為と云て　せぬとふむるれても不の

字まかふぬ乃字とふ乃ぬとのひゆりく
れるゝ河なるゝいさゝ色乃うりてとゝん
ぬりもふ乃ぬあとゝまわ消ぬ刈れぬゝと
へけせてね河めれ仏文まうわつきちぬ
乃まこれくまきるゝやうゝそ乃ゐの
ちゝ乃紙あとゝちゝ
雪まこゝとけぬ深山乃ゆく
ゑふ乃ぬや
雪ゝやゝけぬわ乃ゐ見山
ゑとゝんぬや。

中哥乃義句

名ゐ花ゝいくまめゐや月乃非ゐ
名ゐ花ゝいさゝうんゝやゝゝれ
ゝふ人いゐりやゐやと
ゝゝとゝてすゐや花乃うゝん解
ゝとゝて花乃うゝんゝゐ水ゝゐ
ゐゝやくゝゐゝとゝん
右二句中哥乃義をわゝぬ物ゝうわ
なゝてゝよゝゝとく類ゐゝし
ゝゝゝれやゝゝゝ乃尾のゝゝん

わしひさの山さりの松乃志ぐり松の雨か
くしよ絵ひとりうと称ん
　花いちまと称そ世継乃松さ見れ葉
えしら人い秋乃やきやさうもろ人花とそ
ちらめ称さ人乃まゐめや
右二句季寄よりいそひくいふ成り
　花とる乃そしめや月とみんあけしそ
右さい月と花とめそしこれ乃こと乃流れを
人乃花しるとの
　是や洞そ法花経と読し　常葉

かをる西をとまり似しまいあさ来たり
村り水をいれてそ似し
此二句季寄儒者せしなり
　卯乃花いたりうる夜乃月かしら
うの花のこれ志うと西のはたしかを
ゑ称を止しよかふるり
　とうなへしそちやむしろ風露さし
やむしろしくまゐやしのさ郎きよ
人そ見る称秋いささくる
右乃句季寄の人はなるまくかそたると

中すとて
こまうらや伽羅の焼くゝ毒の花
いかに色のあいのつくゝ花おくゝ
しゝとなれ梨よくゝれ
はかなき中はなくゝれとのあゝれ
難波ゝゝゝれあのかのさをわて
てのゝ波すゝてよゝや
右中すのんとゝりて風情をゝり
尋をゝれゝゝゝのゝゝれ
今ゝんゝゝりとゝのゝゝまゝよ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝやゝりをゝゝゝ花の形
ゝゝをゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
中すのゝゝとゝれゝ
右中すとゝゝゝれゝ并蟻妙遇同
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ありしひ世俗のしわざ紙のりく白化竹人
を路し出雲るらんちんしてとなりへし
詩のんの無る
宗門くもら白面のやられひわれ式
行画白南教十程
かれわくら花やあ風こまさん
春風桃李花開日
月のけをそれい雨やふらくめん
不都の萩月月生
世俗の無る

あいお紙をいひとろやをなへし
俳諧初縁よそいうおかいとりてけとの
ういをのよをわくくまや也
かくやきやわりあらじのこ神楽
天照大神天岩戸をうくれましくくの時
六合しく闇もしかくくよ天鈿女命歌
舞をうていへ戸のまへゆくかうて人の気
円の神めてまひてふしてひ世よおろれる
まし円本紀古語拾遺をうしれあり
世俗のしわざふくせし白

文月やゆくとしくるしくさまの仮
よりてとくとやゆかれまよいりか
ふとけ夢やきしいあいやのやうてす
かなしとうらうの歌句いかくとりよりをくい
いまくはしてゆれたまきまよりくは
とりゆうもとやとや
長歌反句と試筆式
とを句先年付わゆ〻れたるの才三ゆて
やうらひまりきもやくゆうとこまれを
立代いやうきうまゆけらさて

とゆわりとゆ京とけうりあゆとと
きれうりうりのやけうまりてやいくうて
まねをうりうんとをとしゆや
右俳諧は歌の数句切字は先師長坂九
ま仲津先生の物のとうてあうよう
先うしゆうて不也初学よりくしうしひ
とうゆうのうりへ

勝宋三四八句こう事

宇杉所云勝ゝ数句ようをうひて寄とりく
人客ようりうひうしゆ。宋三ゆ物うとりく

して一ぐ　まよそひあるへしと
結巴法眼乃云腸い毅白よりいそひくるぐと
うけうく物乃名ゝなみてを一字まてうあは
なりてよとそうていのみてうあぬ物ゝ云
中乃毅白乃腸い毅白乃ひのこうる
切紙のうく寄乃書紙つくさうやうよりは
一方乃まうてとうこれうとうひくせんい
腸乃白の中ゝさよいあうのいる地腸ゝ松ゝて
はなつつのやうあり。よいあひうい付二よりう
そへ付三よいちうひ付四よいん付ゝよりう

うあ地長次左云うきゝよ射付むうひい地
大ふのうきゝうすすあり
風案よひうむ付とい毅白乃ん紙うきく
うくうあやうそよ付松ゝせうとうあり彼ん付
とうあうあ打そへ付ゝ乃ゝうよひうあ地。
射付いあいいの付ゝうひしく。大ふ乃ゝ
ゝいちうひ付乃ゝうあ地
結巴法眼ひうゝうゝゝゝゝ云ゝ腸乃白よあ
あうゝ毅白よの毅白よ松と根さてうひうう
物うれゝ一白乃中よ松ゝうゝあゝ合ゝゝ

花と黄蝶中くらいと紅白と紅白乃抽物とを
をくる事をうらやましくぬまやもをもとをの
堀ひいたりうをくる
又云弟三い脇乃句よくつさんようもうけ
ちうことなりとやわ句をういやきい弟三氏な
ををくるくるくるます
又云弟三い相伴乃人乃とをくけるをく優
ちうと希事ゆくいたる抽乃義い初ん乃人を
学ひをくを風体とをうわ弟三めををう句作り
丁寧い熟別面八句十句とい者んわ者ゆうを

なを抽高句乃句と脇乃句をうりうさけてやをく
ををくと四句めやわをやいをうりいをうりくわ
ちをくいひをを一す紙ひ八句めい弟三乃句とを
をうをけををくれ法てをうん。韵をうんを
を稱くす紙ひたをくいひををくをうくを
七句めい句めうわ句をとやをくを風案風情
をうわをくす弟三氏ひ八句めい付よ法やうひ紙と
付をくをうくと幽玄体とをうく体をと八
句めうわをうとひ。九句めいをうを法やうわゆく
物みをくを弟四乃句乃てよをとををとわをうわ

下ニ付ケ出ス方ニ懐紙ニ書ノ事
ケ引キテ[illegible]
[illegible]ノ右ニ幕ノ[illegible]ヒ[illegible]ク祖父家[illegible]
瓜法眼ニ[illegible]ケ[illegible]物ニ[illegible]
[illegible]ヒ[illegible]
故ニ[illegible]丸[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

連歌ニ[illegible]
法ニ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
紙巴法眼ニ[illegible]懐紙尺数[illegible]
十三句ノ[illegible]
[illegible]ノ事

書わすれかな

又云十一句めよりわんぜんにて二条中納言

同道にて行とうさわ同伴とあり一句

そうしのへよりの茶句より付りんとして西とうち

句こうまそうれ茶句うきもまぬ所わく付

へて来一句セみうちのうめものわくいたん

懐紙ろうよい二句三句乃うちとんぐりやそ

くうすられ、きうちよりわかい句紫

いりそ連めくく一句仕上そ連歌もたれ

やうあり物あるくんいうきまひ句梅柳

かう乃句と初れんかくく称ひひろ句毎よそく

連めくくゆきやう句と細しまうすきやそ

乃ん句肩要くうあるくうそ

又云行云乃附春句脇弟三乃句をに仕様

乃事。梅花梅柳杉行花と称花ひくく

めくむ花亀杉巳未乃めうい句茶ふうう

未亥乃御部くくそれ部とれれ乃公覆

かうあり部乃まく門道乃ゆうさあんや

うあ墨くく乃行ひ弱そうちとく世代て

行ふ。又云放義乃附雲い句代句をそ限を

とさためたるよしなきにくへからす花をさへ
うむる物あらへうらみとて紛糸とゝへにす
よし夕霧夕霞霜浦霧霧花薄本哥落る
ゑのゝ事もまうとも秋去にいふい付て朝霞晩方
乃きりかき朝りもやうの事やまゝはすうしに
文云紋叢乃附よるよゐゑひ乃さたおわ
義句勝其三月茶
字撰云紋云の叢句よう紀とあいみえんよ勝の
えしめ乃おも法えことまの追りとやう乃
まいすり事きやうすをしとをまつきせらゝ給

みかきのとゆりよ事てきるとめんかんとかれ
しきしとく字なりひくわかなすへて玉柳な
とらみ付んもへきや。野やうれをこうふとよ梅
且はつるや乳ゆくよろのんへきや
思案よ右のゆすめとも勧んよわ後にも
いろゆきく結ひ巨りま枕とりゆめへし
綱巳云名残乃ころまとこしかさき詞字
と労こせぬ物也対句も茶句しひれから
こ河物よくつまし対句みくやもてしとやう
まず切恭乃かに妙なへし

愚案よきいひ出しよきしまふ付
ところともくてやしのかれて名誉のうちは
てもとて批判はさすさらんやうにもてなし
なすへしさいひ出はいはゆる連歌よりの
もことひかき道になくのかれてつるを得
らんてさてもさくれのなかや長頭丸も
さのこの乃あひしやうわきて発句に
すんなりまする一句とりきらんとあま
しみくたへんにおやうれきさりとも
納く文を文もくあまわよめりさや

をかんもとて不足の物をいれたるも名のさ
しもうひとてまへかくえるへし

手尓於葉之口傳

七ノやのよ

口あいのや　霧やこんひとつの谷の年あつよ
切や　雪の夜や十つ十日のきぬかかん
於や　あの人にもさつなんには思ひさや
聲乃や　をりを見る雉なくならせめの前
中乃や　流津しかたの竹やなりこのすかめて
免せもさとりもいふや

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

△[illegible]

[illegible]

[illegible]

む
ゆ
る

け
せ
て

ね
へ
め
れ

いろくいかなるさそ作いくや
つるせよとしらは武押字あくゐて
△かくねらん
とりさしん物ゆへまりとけあくらん
紙不ろくれとろんまりとろけん
△一字とね二字とろ三字とろ三字
不同とも半わり
一字とねと代 押字なくてとろ
あくいらんかんかとん
二字とろ半とも 若白ハやとくもくとろ

三字くろへとも

宗根ニケ月ニ不ニ付ニ
その表ニハくろ新やとハ
ゆうといとも云
ゆわく世ニ世めろ茨
大水とんくくしむまり
宗根云松ニ茨ニ云白ニ
風ニ波ニ生るせくく風東ニ
松ニ風ハくろくまり茨
茨ニ居い今の世ハといくん

四字不同

△治定のうらしゝ事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

是とさいくさをとゆれのうえにうつる月

月ふかく神さびたれば

ゆくすゑ出家のこころもりなり

きさてはたとえ黄白の菊の色と花

白のうらの紅うつるせうとせ

連手

月ふかくもるれば秋のうすさ

雪くもきえのやはの白やうり

[illegible]

かくねてはたとえ花の色の浅のしたえ

面白のかからくさまるまれて

なへゆすきとちゆくいひ出せるも

しるや連手略く

桐の葉きれいまくく雨の玉

[illegible]面のあるやはもしやもと

[illegible]とえ花の色白よりやけさ何

あらうてあらうてあらうあらうあらう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行

[illegible]

[illegible]

△有文乃句作者文乃句作者[illegible]

[illegible]月と猿やかりうる

[illegible]也一句[illegible]

[illegible]乃句より[illegible]

二五三四[illegible]

[illegible]

五二四三[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

これやうは世俗よりもたゝ言葉
いまのはの文のうちの書の色
兼白乃奏とも書とて只ひとへに
ふまくはたらやとのうつり桃花
服うちやひろきをせたくして
ぬすこぶらてまけぬる
所よい俳句は秀句と定家
卜まうるゝ。俳諧は先耳ぢくとも
ゝて俗うきをれたるや俳句の術
めとうるあんはるまんするとや

△歌よ篇序題曲流ゝ云ものあると連句
おもあるゝ〳〵くん教俗部云俳令下の
句よ曲乃んわもとよりと篇序題よ色
ていひ詠ゝ〳〵文上乃句よ曲乃んわても
きゝも乃句と篇序題よいひるゝ
とるんはいい
あゝちきて落くそゆけ
物くるひこゝよいわふき用いること
さぐまとをけいさいゝとこと
ゝんまのふすぬい句乃名のゝて

此句前の下れる句より曲のいりてゝひゞかこ
ゆゑよりは付句と篇序起よるべくいひ
なす前句よりつゞくるなり

とくんるこゝねたりわよ必ずくわ
人くらひ女紙くゝといたまてく
うへいの下きというへよや成ねん
ひさそうりいくらまよいひらを

此二句い前句より曲のんりわくいひわう
たゝ故よ下の句紙篇序起よれて
前の句とうもくいひをくゝうる井えん歌

俳諧連歌いうゑ寸上の句といひのこて
下の句よゆつわ下の句といひたてひく
上句よいたせたゝいてきぬうんこうり
各こよりひたてうる句よい感情秀逸
なるべくしくこの句なり

長歌より篇序起曲流いこの又句の
作りさ句るべ一篇い人の作り易るよ
いまこゝすきゝるる句し序い
中次ゑ紙約とれまを起そ
まといひよきゝるをこの分る史

曲いこまそとあらはすこと也 流れ
いとゆたかにひせうるなり しとやか
なること也 篇〻物のかなとの外也
序は其書の序なり也 跋は其書よ
りのすゑのことばなり也 題は題目也
ひらくとは開きよりなり也
開いとは終まるなり也 敬修都
はつりとは終りを上下あ
わせ一よ吟合せなんとなり也

比用くるくるに冠とあるよりきき
書といくくまはやうなるとこの
ゆくんとあるくこれあるぬきさ
なれたるくきんうきませり
三十辭 愚案よ十倍の中ちりさぬの
きくくありてをくて三十倍なり
比倍のまに於よちりせり

序一 幽玄体
美人とはくをのうるはしき
姿にてきること
きみ閑とをしろむる也よ長発

行雲体

六月よりを打ふ西月
ちかく乃ちりもひきてうき葉風 岡倶

廻雪体

今乃世まてと高砂の神農

七賢とうたひしよわらかく 三安
五葉定家ノ云此神いまは乃口むきてい
よまれぬ姿やとや俳諧に狂ちかたくし

第二 数寄の部

ちりうきうとのうり 雑下

るの閑よいちるり閑乃みやこん高砂

五葉定家ノ云是伊勢物語この名く
ち前長ち伊乃中よりの業まりなし

ちよ体

横笛乃あるよひとん乃拍あけて 長篠

定家ノ云定家卿天性ちいと数寄古年ち
ちいんしに者よりまちくとや

壱自体

石乃うんてやちうひよりり

すくうの中ちをくふ拍のさん 松浦

定家ノ云ちをくれるうやちをくあのの
まち乃ちをと年嬢よりまちくうちうう
物中を濃せあちこうくこうは月あのうり
いひ知くきすちうふりくうんちとやとき

うくあるとの、物いひうりとの

くくきとしいへと字い海乃月 正式

定家ノ云ちをくんを打りてうくうくうひとう
みてよかるこ又云九有心神ヲんを拍とみ也

第三 有心体

たくみやむとめをまんをもちわと

佛乃目をもくゝ弟をもをもの世　長尾

物哀体

もくけいくこをせんん弟のをて

ほいひのらの世ひくくも世ひをんを寿

ふの体

をれをこをよるれ月の思寿

ふをは肩をうを月を逆りをてく　前特監

理世体

定家ハ云理世拙民ハ詠ん計ハ之異域の光

寿吾勢乃延喜天暦乃昔を明時聖代乃

こをるへし

あをを乃系をうつをやれよりれ

一君をうをや徒乃をくよをうをん

拙民体

茶をもをもをる人をうれ仕

撫叙をもをを乃徒をて　法下寿

定家ハ長しくまををつハと合て行ハ歩ハ

ふをを直よ行をををて志ハを面白をを

玄粋体

徒やをめををををん者ををへくれ

叙をを人ををををいをる

あまのをうをも知ををいん者や　長尾

宗匠羅体

定家ハ云ふ拙民ハ徒と学ハをををををる

[illegible]

二月の枝の末にはよりて水あるとて　素性法師

春直体

[illegible]

雪のうちにあるとやうたてはるのはつ花　法橋

花蘇体

日本のもみぢの山のしらさくら

大唐どこうよりそやのこめるん　宗澤法師

春の代とうの雪と分るむ所より　長以九

雲体

[illegible]

竹体

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

拔髮俥　[illegible]

[illegible]

二　写古俥　[illegible]

[illegible]

第六面白俥

[illegible]

佛[illegible]

拾乘いう[illegible]

一真俥

[illegible]

[illegible]

糸曲俥　[illegible]

[illegible]

世乃中[illegible]

[illegible]の尾[illegible]

第七環俥　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遠雲は題摘。行平遠雲と別名なれども遠雲
とは云へども寺の中に落ちる月を若くは
よそなひ歌者の月よりあるよし新色しく
何乃かよ面新乃うつくしきてん寺と乃雲遠雲
乃体とは一つに成て又つやきれしとそ乃
ものひろう心敬僧都云若乃人の遠雲侍らん
ゆうとよやう乃事の思つとまろうかろう
古人乃遠雲とうれとうらいんと云用せし
うややややのの人乃ふうとうい姿乃やさし
きうやしひ乃事うあるうとうい入とうに乃也

人をとうとうばうい何くうろうい法人乃まもんと
はうしひうハ一人のうるうしされと古人乃表上乃
遠雲侍とおうあるうも心法いかのやうや
さうんとのん先立寺歌乃遠雲侍と何法
しうるう何とうれとうれとうわと桃猪と
を打りひとうるうしう今心法わくよ打申面
かくうう面かしまれわまとあれとうい
志りすうのうちのこれうのおれて人とうに意
あるうるうるうよりとわうあうう世よりうるうん
乃ありうとしうをあうう孫と打文法ぬ

丙申睦月初五日重按合之　季吟

同五月十四日讀写之　元隣

延寶元癸丑年仲冬吉日

寺町二条上ル町　開板

さらのはるん